

平成 30 年 6 月 26 日現在

機関番号：35410

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2017

課題番号：16K16777

研究課題名(和文) 習作期における三島由紀夫文学生成過程の解明

研究課題名(英文) Elucidation of the creation process of Yukio Mishima literature during the study period

研究代表者

九内 悠水子(KUNAI, YUMIKO)

比治山大学・現代文化学部・准教授

研究者番号：70726398

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：清水文雄ら「文芸文化」同人に共通するのは、従来の実証的国文学解釈に拠りながらも、「詩人の目」で日本の古典の本質を捉えようとする意志であった。その証拠に、彼らは「文芸文化」を足場として、伊東静雄、佐藤春夫、中河与一ら詩人・作家との交流を盛んに行っている。三島は清水ら同人に文才を見出されて以後、彼らの開いていた古典研究会などに参加することを許され、そこで得た素養は、彼のその後の作品に遺憾なく発揮された。彼らは三島を、国文学者と詩人とを繋ぐ可能性を秘めた人物として評価し、また三島自身その要請に見事に答えたのである。三島の習作期は同人を始めとする複数のメンターに拠ってその土台形勢がなされたと言える。

研究成果の概要(英文)：The common trait seen among contributors or the "dojin" of Bungeibunka, including Fumio Shimizu, is their determination to grasp the essence of Japanese classical literature through the "poet's eye," while relying on the traditional empirical Japanese literature interpretation. The fact that they interacted vigorously with poets and authors such as Shizuo Ito, Haruo Sato, and Yoichi Nakagawa proves this point. After his talent was discovered by the dojin such as Shimizu, Mishima was allowed to participate in the Japanese classical literature workshops they hosted. The knowledge Mishima gained there was reflected thoroughly in his later works. They deemed Mishima highly as an individual who had the potential to connect scholars of classical Japanese literature with the poets, and Mishima in return was able to fulfill their expectations. Thus, one may say that the fundamentals of Mishima's studying period as an author was built by multiple mentors including the above dojin.

研究分野：日本近代文学

キーワード：清水文雄書入 「古今和歌集」 「伊勢物語」 「文芸文化」

1. 研究開始当初の背景

習作期三島文学の生成過程の解明に関しては、これまでも様々な角度から検討されてきた。例えば杉山欣也(『三島由紀夫の誕生』平成20年2月 翰林書房)は、主に同級生や先輩など同人仲間との関連性において習作期の三島の生成過程を見ている。翻って本研究では、より影響力が強かったであろうと思われる清水文雄や松尾聰といった学習院の恩師を中心とする国文学研究者との関わりに着目したいと考えた。またその際、これまで研究資料として用いられることのなかった比治山大学「三島由紀夫文庫」清水文雄旧蔵資料を用いることを新しく試みた。清水文雄旧蔵資料は、三島が恩師清水に送った初版本を軸とし、清水所収の初出雑誌、関係書籍など多岐にわたる。そしてまた、これらの資料には清水の手による書き入れがなされている。すなわちこれらは清水が三島をどのように理解していたかを示す貴重な資料と言える。

本研究を通じて、まずひとつには三島由紀夫研究そのものに対する新資料の発見が期待された。そしていまひとつ、書入の分析を通じ、メンターを介した古典作品や文学思想などの具体的な影響のありようを明らかにすることができると予想された。そしてまた、こういったメンターの存在が三島文学にどのような影響を与えたのかを明らかにすることができるとも考えられた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、習作期三島文学の生成過程を再検討することにある。

(1) 清水旧蔵資料における書入実態を調査し、これを清水と三島の往復書簡等と照らし合わせながら、清水や、清水と同じく学習院で三島を教えた松尾聰らが、三島の古典受容にどのような影響を与え、またそれが三島の

文学思想にどのように関わっていったのかについて考察する。

(2) 旧蔵資料のうち、習作期の同人雑誌・校内雑誌、ならびに関係者との間の書簡等の検証により、三島由紀夫習作期作品の成立事情を明らかにする。従来、個人的な資質によって成立していると捉えられがちであった三島文学が、実は、学習院を中心とする環境の中で、ことに清水文雄をはじめとするメンターらによって複合的に形成されたものであるとの仮説を検証し、習作期三島文学の生成過程の解明を図ることを目指した。

3. 研究の方法

(1) 清水文雄旧蔵資料における書入の実態調査を調査した。資料保存の見地から専門的な書庫を購入した上で、基礎的作業として文庫整理、目録作成、書入の調査、書入の翻刻、書入の分析を行った。特に、鉛筆による薄い筆圧、かつ独特の癖字書体である書入の解読に当たっては、『清水文雄戦中日記』(2016年10月 笠間書院)の翻刻にあたった、清水の御子息(四男)明雄氏の協力を仰いだ。

(2) 清水旧蔵資料の書入と、「文芸文化」同人らの日記・書簡・随筆等とを照合しながら、三島由紀夫習作期作品における古典享受の様子を考察した。

(3) 三島由紀夫の習作期における生成過程の解明を行うため、「文芸文化」寄稿者ならびに、「文芸文化」創刊時前後の同人の交友関係を洗い出し、その影響関係についての考察を行った。

4. 研究成果

清水文雄旧蔵資料の調査からわかったことを以下に記す。

(1) 書入の実態調査における基礎的作業として文庫整理を行った結果、清水宛の書簡(礼状・挨拶文等)が数通見つかった。朝日新聞記者木村卓而からの書簡には、昭和45年11月

30日（朝刊）記事に関する取材協力への感謝の辞が記されている。また、二村化学工業創始者、二村富久からの書簡は、三島記念館開館にあたっての挨拶文であった。なおこの書簡には開館記念の折の写真も一葉同封されていた。二村は憂国忌発起人でもあった人物である。またのちには青嵐会等の右派団体を経済的に支援したことで知られる。これらの書簡は、第一級資料とは言えないが、没後の三島をめぐる様々な動きの一端を示すものとしての価値はあると言える。

このほか、この他に注目すべき資料として『生長の家42(3)』（昭和46・3/三島文庫整理番号MNSe5-85）が挙げられる。ここには清水の長女みをの夫、辻景虎が熱心な信者であり、清水の妻房江も生長の家創始者谷口雅春の講習を受けていたことが記されており、これまで知られていた三島と生長の家のかわりに加え、清水家との関わりも明らかとなった。以前拙稿（「比治山大学蔵『三島由紀夫文庫』調査報告（3）」平成27年12月「比治山大学紀要22」）において、右翼雑誌「不二26(2)」（昭和46年2月/三島文庫整理番号MNFu5-78）、「新勢力16（1）・（2）」（昭和46年1月・2月/三島文庫整理番号MNSH5-76・77）などの調査から見てきた三島と影山正治、毛呂清輝との関連を指摘したが、改めて三島を巡る保守系誌の分析を行う必要があることが今回の調査を通じ分かった。

書入は主として、重要箇所への傍点・傍線、丸囲みと重要キーワードの抜き出しで、ところどころ語句が記されている箇所もあったが、その殆どが断片的なものであった。本研究では「みのもの月」（昭和17年11月「文芸文化」/三島文庫整理番号MAMi0-84）における書き入れを元に、三島作品における古典享受の一端を明らかにしたが、その他の作品についても今後検討していく必要がある。中でも、晩年の評論や、三島に関する評論文等への書入の割合が多い。「小説家の休暇」（昭和29年6

月『芸術新潮』/三島文庫整理番号MAMi0-13）の表表紙裏の書入はかなりまとまった量のメモとなっているが、そこには「三島と私 彼を「師」として現代青年に接している。彼らを理解する鍵をえようとする」との文言が見られる。清水にとって三島は、教え子であると同時に、自身を導く存在でもあったと言える。

（2）清水文雄旧蔵資料の調査結果ならびに、清水を中心とする「文芸文化」同人の書簡、日記、評論を分析した結果、わかったことを以下に記す。

まずは三島作品における古典の影響についてである。『清水文雄戦中日記』や三島と清水の往復書簡等から、三島は「文芸文化」同人との勉強会・交流を通じ特に「古今集和歌集」、「伊勢物語」の影響を強く受けたことが分かる。三島は時に意識的に、時に無意識的にこれらを作中に取り入れた。前述したように、旧蔵資料の「みのもの月」には清水によって、作中に引かれた和歌の引用元が書入されている。三島は作中に和歌を引用することで、教養と知性に満ちた登場人物を造型した。また王朝人の、「待つ」＝「耐える」苦しみと悲しみを「重層的・立体的」に描出することにも成功している。更には、和歌から和歌へと連想をつなぐことによる物語展開なども、書入を手掛かりに分析した結果見えてきた。

このほか、三島の古典享受に関して、清水が「衣通姫の流」（昭和18年1月～19年8月「文芸文化」）において導き出した「古今和歌集」恋歌に見られる「喪失」・「永遠の恋人」（＝「花」）の問題と、三島文学全般にわたって見られる「存在しないものの美」という思想の類似性を指摘することができる。特に「近代能楽集」（「班女」昭和30年1月『新潮』/三島文庫資料番号MNS1955）にその傾向が顕著に見られるのだが、清水自身、その類似性に気付いていたことも書入からうかがえた。

(3) 本研究では「文芸文化」という場が三島由紀夫の生成過程にどのような影響を与えたのかを考えるため、「文芸文化」に寄稿した人物をリスト化し、所属団体や生年、業績等の整理を行った。寄稿者は、国文学者、日本浪漫派関係、文学者とバリエーションに富んでいる。これを「清水文雄戦中日記」や同人たちの書簡・日記等の記述などと照らし合わせると、「文芸文化」創刊と前後しながら、清水をはじめとする同人の人間関係が国文学から文学者へと拡大し、同人の研究活動に刺激と影響を与えたことが見えてきた。清水、蓮田善明、池田勉、栗山理一ら「文芸文化」同人に共通するのは、従来の実証的国文学解釈に拠りながらも、「詩人の目」で日本の古典の本質を捉えようとする意志であった。ことに、伊東静雄、佐藤春夫らといった詩人との交流から同人たちは「貪欲に何かを嗅ぎ出そうとつとめた」。このような関係性は、同人らの国文学解釈に影響を与えたばかりでなく、三島が後に文壇へと接近するきっかけともなったことはよく知られているところであるが、中でも栗山理一が果たした役割は大きい。彼は同人と伊東を結び、また伊東を介し同人と富士との繋がりをつけた。のちに三島が「エスガイの狩り」(昭和20年6月)を「文芸」に発表するにあたり仲介役となったのも栗山である。習作期作品への批評などで直接的に三島と関わった清水、思想の面で多大な影響を与えた蓮田はもとより、栗山や池田らが果たした役割についての評価も必要である。

(4) 三島は清水ら同人に文才を見出されて以後、彼らの開いていた古典研究会などに参加することを許され、そこで得た素養は、彼のその後の作品に遺憾なく発揮された。「文芸文化」同人は三島を、国文学者と詩人とを繋ぐ可能性を秘めた人物として評価し、三島自身もその要請に見事に答えた。そしてまた三島も伊東や佐藤と同様に、同人らの研究を刺激する存在であり、教える者から教えられる

者といった一方通行的なベクトル内にとどまるものではなかった。三島の習作期は、同人を始めとする複数のメンターの中で、双方向的にその土台形勢がなされていったと言える。(なお、本研究の成果については一部公表済みであるが、未発表部分に関しては、平成30年度内での公開を予定している。)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

九内悠水子、「三島由紀夫「みのもの月」論『文芸文化』同人と「古今和歌集」」、24巻、2018、比治山大学紀要、査読無、1-13
<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hijiyama-u/detail/1251220180521133427>

〔その他〕

ホームページ等

FaceBook【比治山大学三島由紀夫文庫 - Yukio Mishima Library】

<https://www.facebook.com/比治山大学三島由紀夫文庫>
[Yukio-Mishima-Library--1444546972518207/](https://www.facebook.com/Yukio-Mishima-Library--1444546972518207/)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

九内悠水子 (KUNAI, Yumiko)

比治山大学・現代文化学部・准教授

研究者番号：70726398

(4) 研究協力者

清水明雄 (SHIMIZU, Akio)